



WEEKEND

彼の魂に損失の通知を書くために

2018年2月6日、私は韓国の平昌にいました。具体的には、マクドナルドがカウンターを設置していたオリンピック村のダイニングホールです。私はチリチキンバーガーを注文していました。レシートにはクラウン0と書かれていましたが、私の首には認定バッジがついていて、すべて無料でした。5日後には5メートルの000スケートに出場する予定でしたが、今日は

腕立て伏せをします。私には、人生最大のチャレンジが待ち受けていました。わずか2週間後には、陸軍ハンター大隊のKP（追試、編注）に行くことになった。

私はその611月に入居し140た新入社員の一人で、蚊と沼地が主な特徴の場所で、光り輝く140魂が沈まない太陽の光を反射していた。私たちは列に並び、ベストを尽くしました。正しいことをするためではなく、間違っただけをするためでもない。

訓練の2週目、私たちは飛行場で、戦闘機小隊が射撃場に向かうバスに荷物を積むのを見ていた。増援小隊の私たちにはバスは来ませんでした。隊列の中には、目の下に黒い袋を持ち、背中にコンバットバックを背負った40たドラゴンがいた。隊列の先頭にはヘンリックソン少佐がいて、我々よりもはるかに大きなリュックサックを背負っていた。その後、運動のために持っていた土嚢が入っていたことが判明した。

GOT NO CREDIT

射撃場「Rälsmålsbanan at Arvidsjaur」でターゲットを設定する前に、道路や小道を歩きました。一日の終わりに、ヘンリックソンは帰りにロボット山を越える旅に連れて行ってくれた。そこで彼が説明したのは夏の学校が終わるまでに、援軍部隊は射撃場のすべての山を登らなければならない。

この手順を、次の週も毎日繰り返しました。他のメンバーよりも多く行進しても評価されることはありませんでしたが、おかげで私の背中はかなり矯正されました。

ヘンリックソンは、自分が何をしているかを知っていた。タフネス、プライド、インスピレーションを生み出した。そして何よりも、彼が導いてくれた。

最初の数ヶ月はみんな頑張っていました。夏の終わりには、成績に応じてそれぞれのポジションに配属されます。

動をする、固まる、兵舎に行く、医療を受ける、恋人に電話する、ジムでベンチプレスをする、ベッドで休む、というものだった。



ニルス・ヴァン・デル・ポエルはハンタートレーニングを修了したことを喜んでいる。しかし、彼はユニークな「シグナルマン」として選ばれた。

これまでに私は、自分がどのようなポジションに就くかは気にせず、ただハンターの小隊に入りたいと思っていた。

しかし、私は信号係にはなりたくなかった。信号係は底辺の存在だったからだ。班長になるほどの実力もなく、射撃もできず、医療業務も任せられないような者たちだ。

夏期講習が終わると、私はハンター小隊の信号手として配属された。夜な夜な領収書を探すのに熱中し、渉外部への嫌悪感はすぐに消えました。バックパックは最も重く、真夜中にテントから這い出してアンテナを操作するのは大変でしたが、とても満足の数々のものでした。

しかし、他のシグナルマンが優秀なのが気になった。誰かが私のために諦めてくれないか？

暗い暗い日

ラップランドの日が暮れると、それまで太陽の光を反射していた新兵の目も暗くなってきた。そして、ついに太陽が見えなくなってしまった。バックパックは想像以上に重くなっていた。

決まっていたのは、朝の日課、派兵、少尉の命令で口の中の歯磨き粉を拭く、射撃場に行く、待つ、固まる、運

遅すぎるくらいです。繰り返します。

クリスマス休暇に入っても、まだ募集125は続いていました。私たちのやる気が吹き飛びました。ほとんどの人が成功していた。

Detachment Norrlands Dragonerのダイニングホールのプラカードには「A unique elite」と書かれていた。そうなんだけど、個性的な感じはしなくて、冷たい感じがすることがほとんどだった。

演習から入ったときが一番厳しかったですね。睡眠不足は深刻でしたが、個性を感じるほどではありませんでした。補強小隊の兵士たちは、いつも最も睡眠時間が短く、潜入時間も最も長く、医療施設で会ったときには、まるで黙示録のようだった。

リュックサックは数キロ重くなったが、狩猟小隊の我々には何の不満もなかった。私たちは遠くまで歩き、重い荷物を持っていたが、誰もが荷物を置いてあきらめることを選ぶほど遠くも重くもなかった。ほぼ全員が成功しました。小さな人でも荷物を持てるようになり、丘の上にいた2人の女の子も最終的には狩猟用の弓を手に入れた。

諦めた人はほとんどいませんでしたが、私のモチベーションには必要だったのでしょう。自分のエゴが大きすぎて、同業者が強すぎた。

新たな光と魂を求めて

春先に初めて損失報告書を書きました。私はランプをなくしてしまい、見つけることができませんでした。AFSE (Notification of Lost Injured Self-judgement、編注) を通過させるために、私はユーモアのあるアプローチで、ランプと魂を失った経緯を生々しく記入した。

「...私は長い間、彼らを見つめるために長い行進をすることを切望していましたが、そのような行進はまだ行われていません。その代わりに、新しいものを提供してくれることを期待しています...」。

翌週にはチューターが訪れ、新約聖書のフィールド版を渡してくれました。私はランプなしでやっていました。

私のレポートは冗談で書かれたものですが、私の一部はアルヴィッツヤールの南側で亡くなりました。

射撃場です。焼け付くような擦り傷や肩の痛みで固まってしまった部分があります。私の一部は

「私の魂の一部は、池の底に埋もれ、後世の水を汚しています」。

LACKED PRIDE

私は優秀な兵士でした、軍歴にもそう書いてあります。しかし、残念ながら、私は常に誇り高い兵士ではなかった。あまりの寒さに本部が最後のスキー行進を中止したため、ハンターズボウの授与式には無関心でした。最終訓練では他の厳しい場面で補ったが、プライドは補えなかった。

私は、防衛省の最高級の訓練バッジを肩につけて、他の人と同じような気持ちで列に並んでいました。長い行進をしてみたいと思っていた。

は、バックバックを落として「こんなのどうでもいいや！」と諦めていたでしょう。いつか司令部が部隊の前に立ち、3分の1ずつ分け

てくれればと、どれほど願ったことか。そうすれば、私も独自のエリートとしての誇りを持つことができたかもしれません。もしかしたら、私は一生懸命パイオニアになろうとしていたかもしれません。もしかしたら私は、最も過酷なポストパスを志願していたかもしれません。もしかしたら、誰かに「この景色を見るために、Ro-botbergetを経由して遠回りしてみよう」と思わせることができたかもしれない。

自分は他の人ができないことをやっているユニークな存在だと思っていた。私の心の一部は池の底に埋もれ、後世の新入社員のために水を汚しています。

陸軍のハンター大隊での兵役は、私にとって最も過酷なものです。諦めた人がほとんどいなかった理由は分からないが、諦めた人の中に入れたことは嬉しい。私は仲間を愛していますし、指揮官には永遠に感謝しています。毎日、バックバック、仲間、そして仕事が恋しくなります。

ドラゴンVAN425

ニルス・ヴァン・デル・ポエルは次のような人です。

スウェーデン史上最高のスケートの才能。オリンピックに集中するためにスポーツ活動を休止する2020まで2018は中でもアルヴィッツヤールでは兵役に就いていました。2月、彼は

は、ワールドカップでスウェーデン初の金メダルを2つ獲得し1976、メートル10000では世界新記録を樹立しました。

